

---

19

揚羽蝶@根暗

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

19

### 【Nコード】

N6500C

### 【作者名】

揚羽蝶@根暗

### 【あらすじ】

リストカット、オーバードーズ、援助交際、今の時代珍しくなくなってしまうもの…そんなことを繰り返す少女「真弥」。鬱の発病した中学時代…過ちを繰り返し、自分を見つけた高校時代…初めて足を踏み入れた憧れの歌舞伎町…そして、彼女は夢を掴むためキャバ嬢になった。今の時代どこにでも、いるようような1人の少女の成長…

## 「15」はじまり。（前書き）

感情移入しやすい方は読まない方がいいかと思います。

全てが事実とは言い切りませんが：大半事実ですかね（^ー^；）  
その変はご想像におまかせします！

まだまだ完結ではありません。ちまちま書いてます。文才がないです。ごめんなさい。

「15」はじまり。

この小説は私の実体験を交えながら作ったお話です。

どこにでもいる、普通の女の子。  
普通の意味がわからない。

何が普通で何が普通じゃないの？  
あたしの名前は真弥。あたしは生まれてまだ19年。生きる意味を  
…目的をやつとみつけたんだ。

あれは中学生の時だった…何もかもが嫌になった。忘れもしない…  
夏の日。

「15」

またか…。毎日家では親が喧嘩。学校ではなんとなく過ごして1日  
が終る。

部活に行けば1人ぼっち。  
生きてても意味がない。死んだほうがいいんじゃないの？そんなこ  
としか、考えてなかった。

暑くて仕方なかったある夏の日、初めて手首を切った。

「……、このまま死ねないのかな？」

親も学校も友人関係も何もかもが嫌になったんだ。知らないうちにカッター持って手首を切ってた。

痛くない。そう思った。その日以来、毎日切った。みるみるうちに、左腕がボロボロになった。

「痛っ……」

体育の時いきなり左腕が痛んだ。

「どうしたの？ ひねった？」

バトミントンでペアを組んでた友達が心配そうに話しかけてきた。

「……多分！ なんともないよ！ ちょっとひねっただけだから！」

「本当に？ 無理しちゃだめだよ！」

「ありがとう！ でも、大丈夫だから！」

ピーー！！

集合の合図の笛の音が体育館に響きわたる。

運良くこの日の体育は6限目、この後授業はない。体育が終わった後、あたしは慌ててトイレに駆け込んで腕をまくった…。

体操服に少し染みていた。リストカットの傷口が開いてた。

赤く染まった体操服。体操服の色のおかげで、幸い目立たない。血がとまるのを待ち教室に戻った。

「大丈夫？気分でも悪かった？」

「うつ、うん…ちょっとめまいがしただけ…」

「無理しちゃ駄目だよ？」

「ありがとう！」

その日、また部活を休んで帰った。

落ち着かない。頭が痛い吐き気もする。人が嫌だ、外に出たくない

…何にもヤル気がおきない…

そして、繰り返される自傷行為。

気が狂いそうだった。

そして、気がつけば冬になってた。

中学3年生、受験真っ直中。

勉強するふりして起きてては手首を切った。

眠れなかった。

眠りたいのに眠れない。そんな夜が始まった。

「死にたいよ…生きてちゃ駄目なんだよ…あたし…」

そんな言葉しかでてこなかった。

でも、唯一の支えが音楽だった。  
偏見の塊。みんな離れていった。気持ち悪い、頭がおかしい。口々に言われた。

でも、支えなんだ。離れていても別によかった。  
だって結局は友達なんかじゃなかったもん。

そんなある日いつも一緒にいた何人かに手首をみせた…。

「駄目だよ！切っちゃ！もう、やめなよ！」

そんなことしか言われなかった。

でも、苦しくなつてまた切った。  
駄目とか言われても無理だよ…  
こうしなきゃ駄目なんだよ…

限界だった。

そんなある日、いきなり親に腕をめくられた…

「何これ？」

「……………」

「なんでこんなことしたの！？あんたなんか生まなきゃよかった！」

母にまで言われると思わなかった。

父には

「死ね」って言われる始末。

ああ…私やつぱりいらな子だったんだ…

ごめんなさい。生まれてしまつてごめんなさい。

切れずに泣いた。あの日あたしは、死にたかった。

やつぱり眠れなかった。たくさん薬を飲んだ…。でも、眠れなかった。死ねなかった。

朝はきた…

いつもどおり、学校に行つてまた偏見つけて帰宅。

携帯がなった…

母からのメールだった。

謝罪の言葉と、ショックを受けたこと…メールをみてまた泣いた。



甘えることを忘れてきた、あたし。

愛されていないなんて勝手に思い込んでいたあたし。

生きてていいんだ…生きなきゃ駄目なんだ…。

## 「15」2分の1

卒業して、少しは落ち着いたと思ってた。でも、ほんとの戦いはここからだっただ。

毎日、何もする気がおきない。外にでれない。人が怖い…、いきなり息苦しくなつてめまいに吐き気。相変わらず夜は眠れない。

ネットを通してできた友達…唯一の理解者だった。そんな彼女に相談した結果、あたしは病院に行く事にした。あちこち調べて、家から少し離れた病院を選んだ。

病院に着くまでの、電車の中、大音量で曲を聞き、下を向いたまま座っているのが限界だった。

小さな病院…、古い建物だった。

15歳だったあたしには、なんだか怖くてたまらない場所だった。

「どうぞ、診察室へ。」

簡単なアンケートを書いた後、看護師があたしを案内する。

「こんにちは。」

笑顔でこちらをむく医師。

「……んにちは……」

暫く、普通の話なんかもしながら病氣の話をした。

医師に下された主な診断は鬱…。軽い対人恐怖。不眠症。だった。

精神安定剤と眠剤をもらった。

でも、数回通院してあたしは通院をやめた。

なんだか…あわなかった。たかが数回の通院で、病氣が治る訳もなく、同じ事の繰り返し。

リストカットもやめれなかった。

あたしは、気がつけば高校生になっていた。

「真弥!!おはよお!!」

「おはよお!!」

何でもない顔して、あたしは学校ってやつに馴染むのに必死だった。でも、馴染めなかった。

「真弥って…こんな服きてるの…?」

「えっ?」

ロリタファッション。

あたしは昔から何かと個性が強かった。あたしはロリタやゴシックって言われるジャンルが好きだった。

好きな服を着てたら素の自分で、そして強くなれる気がした。

また…偏見が始まった。怖いもので偏見っていうものもすぐに慣れた。

むしろ、好きな事をしてるし堂々とやってた。やっと友達もできた。

「真弥ちゃんリストカットしてるの?」

「えっ……?」

「傷口が…見えちゃったから…」

あたしの手首から腕に残る傷跡…誰が見たってすぐわかる。でも、あたしは隠さなかった。

「やってたよ。未だにやめられないけど。」

「あたしもなんだ…滅多に切らないけどね。」

「そっか…」

あたしだけじゃないんだ…そう思った。

そしてこの頃からまたあたしは狂いだした。

援助交際…。お洋服も欲しいしライブにだっていきたい。部活でバイトしたってあまりできない。

大嫌いな自分を今更いたわる必要もない。みんなやってんじゃん。

あたしは自分を売り物にした。

適当に話して金もらって。ホテルいつて金もらって。簡単じゃん？怖くなんてない。もし、殺されたらむしろラッキーだ。あたしは死にたい人なんだから。

母からのメールを見て生きなきゃって思ったのは確かなのに…自殺願望は相変わらず消えなかったし、病気も治らなかった。辛いだけの毎日、支えといえば音楽。でも、お金がなかったらライブには行けない、つまり自分を押さえる事ができない。

だから、援助交際に手を出した。

知らない人に何回も抱かれた。

暫くたってやっと何人か仲のいい子もできて、学校にも慣れた。

なんだかんだで楽しかったな。

「真弥？」

「ん？何？」

「いい相手いた？」

「今日はいないなあ。」

「そかぁー」

これが日常会話。友達がやってるからやってたわけじゃないけど…  
なんか情報とか交換してたなあ。

そんな生活が続いた。

気がつけばあたしは17歳。まだまだ大人ぶった子どもだった。

## 「17」絶望

まだまだ大人ぶった子ども。あたしは、17歳になった。

初めて手首を切ってから2年。初めてオーバードーズをしてから2年。

あたしは、何も変わってなかった。

「真弥！今日暇？？」

「…？なんで？？部活終わってからならいいよ。」

「じゃあ、また連絡するよー。」

「うん、わかった。」

中学の頃とは違い、一応真面目に部活には行ってた。楽しかったし、偏見する子もいなかった。先生って大嫌いだったけど顧問の先生は違った。

あたしは、あまりリストカットをしなくなってた。その代わりにピアスをたくさんあけた。校則違反だったけど、あたしにピアスはなくてはならないものだったから。

何かある度にあけた。1つ1つに意味があった。思いを込めて、それを忘れないようにピアスという形で自分に残してた。

校則違反なので、見つかると思われたけど、顧問だった先生はその後に必ず心配をしてくれた。

あたしは、それが嬉しかったんだ。

「もしもし、真弥？部活終わった？」

「終わったよ。今どこ？……わかった、すぐ行くね。」

学校近くのファミレスにあたしは向った。

「ごめん待った？」

「大丈夫！真弥なんか頼む？」

「うん。ドリンクバーでいい。」

「食べないの??」

「お腹減ってないからー。」

「そかあ、ぢゃああたし食べるよ? いい??」

「せっかく待ってくれてたのにごめんね?」

「いいってば!」



あたしは、食べれなくなってた。食べると吐きそうになる。食べなくても特にお腹は空かない、1日1食でも十分。あたしの拒食症がはじまった。

「真弥！きたよ！！あれじゃない？」

「多分そうだわ、行ってくるね。」

この日もまたあたしは、体売る。

「名前なんていうの？」

「？？あゆみだよ。」

「あゆみちゃんかぁ、また会ってくれる？」

「もちろんだよ！」

バカバカしい。いちいち名前なんて教えないよ。

あたしは、毎日違う名前で抱かれた。

財布に何万も入ってて当たり前。金が無くなりや、誰かつかまえて。そんなことの繰り返し。

「あゆみちゃん…腕の傷どうしたの？傷跡もたくさんあるね？」

「…べつに。」

「リストカットってやつ?？」

唐突に客に聞かれた。

あたしは、金くれるやつはみんな客って呼んでたしそう思ってた。

「そうだよ。自分で切ったんだよ。」

「痛くないの?」

「痛くないよ。」

「でも、切っちゃ駄目だよ。」

「……なんで?どうして、切っちゃいけないの?」

「しんぢゃったらどうするの?」

「いいよ。べつに。」

「駄目だよ。」

「……。うるせーよ!!あんに、あたしの何がわかんたよ!!」

「わからないけど、切っちゃ駄目だよ。」

「……偉そうに言っんじゃねーよ!!」

こんなやつは、初めてであたしは、どうしていいかわからなくなつた。そのままホテルを出て指定した場所まで送らせた。

「あゆみちゃん、またね。」

「……………」

またなんてないよ。あたしは、気分が悪くなって客と別れてすぐに手首を切った。

みんな決まって言う言葉

「切ったら駄目」

なんで？あたし悪いことした？自分を切ったらどうして、いけないの？

誰か教えてよ……。

「真弥どうした？顔色よくないよ？」

「……………」切りたい……なんで切っちゃいけないの……あたしはこうしなきゃ駄目なんだよ……！」

「いいよ。切つて。その代わり切ったらあたしに見せな。手当てし上げるから……」

「……………」えっ？」

あたしは、嬉しかった。初めて言ってくれた…切っていいよって。  
あたしは、それ以来切る度に手当てをしてもらった。

気がつけばあたしは、17歳。高校2年生。  
見た目はどこにでも、いる女子高生。

まだまだ子ども。あたしは世の中をなめきってたね。

そんなあたしにも、最愛の人ができた。  
滅多に会えなかったけど大好きだったんだよ。  
援交する度に初めて罪悪感が生まれてた。  
自分を傷つけるのも減っていった。

そんな矢先、母に援交がバレた。  
当たり前だけど怒られた。でも、あたしはその場しのぎで  
「悪いことした、もうしません。」って顔をした。

あたしは、バレても懲りずに援交を続けた。  
愛する人には罪悪感でいっぱいだったけど、自分を傷つける事に対  
しては何も思わなかった。

まだまだ子どもなあたし。  
若干17歳。

終わらない夢をみてるみたいな毎日。

## 「17」悪夢

17歳になった。

初めて、

「死にたい」と思いながらもダラダラと生き続けて早くも2年。

実行に移さなかったのは、あたし自身が…生きる為に切っていたから。

中学生の時ほんとに苦しかった。ただの甘えかもしれないけど、あたしは押し潰されそうだった。本気で死にたいと何回も思った。

でも、段々と気がついた。生きなきゃいけない。

死ぬ為ではなく生きる為に切っていた。

矛盾した行動で、自殺願望なんていうのも消えなかったけど、生きたい自分も確実にいたんだ…

生きている証、赤い血を見る度に不思議と落ち着く自分。

息苦しいのも、恐怖心からも逃れられる、唯一の手段がリストカット。

ボロボロになった手首、体、心。それでもあたしは止められなかった。

眠れない毎日、繰り返される自傷行為、食べ物を拒む体。まるで、長い長い、覚めることのない悪夢のような毎日。付きまとう自殺願望。

漠然と沸き出て来る恐怖心、孤独、寂しさ。

あたしは…ほんとに…愛されたかったんだ…  
でも、感情表現が苦手なあたしは、いつも誰かとぶつかってた…  
ちゃんと愛されてる事も気がつかずに。

「真弥痩せた？」

「んー？体重は落ちたけど。」

「ちゃんと食べてる？」

「んー。あんまりお腹減らないしね…」

流石に、周りの友達も心配しはじめた…。

いつも手当てしてくれた、薫ちゃん。話をたくさん聞いて、助けてくれた京子ちゃん。

誰よりも早くあたしの変化に気がついてくれた。

「京子、今日ひま？」

「何、真弥？」

「泊まってもいい？？」

「あー、いいよ！きな！きな！！」

「ありがとう。」

「また親ともめたんでしょー？」

京子が見透かしてるような顔してあたしに問い掛けた。

「…プハッ！！よくわかるね、あたしのこと。」

「プッ！！真弥は単純だからね！」

その日は久しぶりにぐっすり眠れた。

そして、あたしは気がつけば高校3年生。

「真弥！！ヤバイよ！！！」

「ん？どうしたの？」

薫ちゃんが朝から息を切らして走って来た。

「あたし…彼氏と別れたの！！！」

「プハッ！！アハハ！また？」

「アハハハハハ！！！」

つまらないことでアタシ達はよく笑った。馴染めなかったクラスもクラス変えがないせいもあってか、はたまた彼女達2人のおかげか、喧嘩はたくさんしたけど、少しずつ馴染めるようになってきた。

あれだけひどかった、あたしも少しずつマシになっていった。

何にもなかったかのように、今までの生活が嘘だったかのように日々は過ぎた。

あたしも、リストカットは知らないうちにしなくなった。同時にO Dもしなくなった。人込みは苦手だったけど、外に出るのは怖くなかった。

今まで辛かったのが嘘のように過ぎていった。

どうしようもなかったあたし。

死に損ないだったあたし。

なんとなく変わったあたし。

17歳。



## 「17」卒業

卒業間近の高校生真弥17歳。

嫌でも避けて通れないのが、進路。

あたしは、今までただ死にたいだけの人だった。

夢もあったけど、成績の悪かったあたしは諦めた。

「真弥、進路どうするの？」

「どうしようね。京子は？」

「あたしは、大学行くよ。」

「薰は？」

「あたしは、就職！」

「そかあ……」

その時だった……

「松口さん！松口真弥さん！職員室まできなさい！」

担任直々に呼び出しをくらったあたしは、重い腰をあげた。

「あんた何したの？」

「どうせ進路でしょ？」

2人に、冷やかされながら、あたしは職員室に向かった。

「失礼します。」

「松口さん、ちょっと座って。」

あたしは、担任が大嫌いだ。ムスツとして、制服のポケットに手を突っ込んだまま、職員室の隅っこの椅子に座った。

「まず、貴方、ピアスは外しなさい。校則違反よ。」

「……………」

「…、外しなさい。」

少し声を荒げて言う担任を睨みながら、渋々ピアスを外した。次から次にとられて行くピアス。

「あなたねえ…一体いくつあけてるの…」

呆れた口調で担任が言う。

「さあ……………」

あたしは、分かってるけど、話したくないからため息混じりで答えた。

「貴方、進路はどうするの?」

「……、さあ……。」

「ご両親とは、お話したの?」

「……別にいい。」

「あのね、貴方、みんなはもう決まってるのよ!」?

「……だから?」

「取り残されてるのよ!」?

「……ふーん。」

「恥ずかしくないの!」!

「別に。」

「このままじゃ、卒業も危ないわよ!」

「……ふーん。」

「聞いているの!」?

「……うるさいなあ。聞いているよ!」!

「今週中に決めてね。これ、調査表だからちゃんと書くのよ!」

「……………」

あたしは、調査表を持って無言で職員室を後にした。

「夢…かあ…」

あたしは、バンドが好きだった。ライブを見に行くだけじゃなしに自分もステージに立ったりメイクスタッフをしたりしていた。

かといって、歌手になりたいわけでもないし、バンドで食べていくとも思ってもいなかった。

でも…メイクだけは…やりたかった。

それが夢だと気付くまで時間はかからなかった。

それから3日後の放課後、あたしはまた担任に呼び出しをくらった。

「松口さん、これはどういうことなの!!」

「……進路。」

「就職もしないで学校にも行かないで、何が進路なの!!」

「……………っさいなあ。」

あたしは、進路希望に

「勝手にする」と書いて提出した。

「ねえ、先生はあなたの事思ってるのよ?」

「……………笑わせんなよ。」

「松口さん!!!!いい加減にしなさい!」

「……………その台詞そのまま返してやるよ。」

あたしは、担任を睨み付けドアを勢いよくあけて玄関に向かった。

そこには、京子が心配そうに待っていてくれた。

「あつ、ゴメン。帰ろ!」

「早かったね?」

「松口!!!!!!」

担任があたしを追って走ってきた。

「…んだよ。これ以上お前に話す事なんかねえよ。」

「まだ、話は終わってないでしょ!!」

「帰ろ、京子。」

「…真弥に何言っても無駄だよ。諦めなよ、先生。」

「……………」

担任はそれっきり何も言っていなかった。

「アハハ―!!見た?真弥!アイツの顔!マジうける!」

京子が笑いながらあたしに話しかける、つられてあたしも笑う。  
あたしだって…考えてるんだよ。

それから、卒業式まではあつという間に過ぎた。  
なんとか、あたしも卒業は確定した。進路もバイトしながらお金を貯めて学校に行くって形で落ち着いた。

卒業式は、あんまり覚えてない。悲しい訳でもないし嬉しい訳でもない。  
席が近かった薫と目が合う度笑ってたことくらいしか本当に覚えてない。

息苦しかった制服もなくなった。

でも、犯した過ちは消えない。

自殺未遂、オーバードーズ、拒食、援助交際。それを…忘れさせないかのように残った腕の傷跡。

あたしに残ったのはリストカットの傷跡だけ。

愛する人も…いつの間にかいなくなった。

自業自得だなんて…今更思って…

帰ってあたしは泣いた。今までの分を全部流し去るかの様に…誰もいない部屋で泣いた。

でも、京子と薫は最後まであたしを見捨てないでくれた。それが嬉しくてまた泣いた。

松口真弥 18 歳。

高校卒業。

そして、新たな道に…



## 「18」選んだ道

高校を卒業して、あたしは働きだした。

規則のゆるい会社に入ったあたしは髪もかなり明るい色にしたり、更にピアスを増やしたりと今までの分を爆発させるかのように変わっていった。

でも、おもっように貯金はできず、あたしはバイトを掛け持ちするようになった。

忙しくて大変だけど、毎日がとても楽しかった。

京子と薰とは相変わらず連絡はとってたし、よく遊んだりした。

そして…あたしにはもう1つ楽しみがあった。

ホストクラブ。

聞こえはよくないかもしれない…でも、あたしには憧れの人がいた。

その人に会う為にあたしは、ホストクラブに行く用になった。

「真弥ちゃん？メールくれてたよね、初めまして！」

あたしは、泣いた。感激して泣いた。こんな事はライブ以外初めて自分でも、びっくりするくらい泣いてしまった。

そして、あたしはホストクラブに通うようになった。音楽と同じくらいの支えになった。

でも、恋愛感情は不思議と沸かなかった。それでも唯一あたしが素直になれる場所だった。

18歳の夏あたしは初めて東京に行った。

ライブの遠征。鞆に溢れる荷物、それと同じ位溢れる希望に楽しみ。右も左もわからない大都会に1人足を踏み入れた。

ライブ前にはコスプレなんかして。ライブは思い切りハジケテ。

そして、その夜初めて足を踏み入れた憧れの歌舞伎町。

キラキラ輝くネオン街。明るい処は大嫌いだったのに不思議とこの場所は別だった。

あちこちに散らばるホストにスカウトマン。それにサラリーマンの集団、綺麗に身を纏った女の子。

慣れないヒールをはいて慣れないメイクに髪型をしてあたしは背伸びしてこの街に入ったんだ。

寂しさも不安も此処に来れば全部かき消された。眠らない街歌舞伎町。

あたしは、この街の虜になった。

以来あたしは、月に1度は訪れるようになった。楽しくて仕方ない街。ネオン街は18のあたしの憧れだった。でも、この頃のあたしは何もわかってなかった。飲み込まれていないつもりだった。でも、十分飲み込まれていた。

そして・・・あたしは、キャバ嬢になった。キャバ嬢「あげは」が生まれた。

## 「19」決断

あたしは、新たな道を歩いていた。キャバ嬢。慣れない事だらけの世界。

飲めないお酒を飲んで、ひとみしりをかくして必死になって話してた。でも、なかなかとれない指名。なんども、慣れないヒールにまずく姿はまるで自分の人生そのもの。

毎日、くやしくて、もどかしくて泣いた。

ドラマのような綺麗なだけの世界なんかじゃない。世間が思ってるような、楽な仕事なんかじゃない。でも、悪いもんでもない。あたしは、自分がこの仕事をやってるうちに、同業にあたる今まで通ってたホストクラブのことを思い出した。なんとなくは、わかったこと。でも、こうもハッキリわかると、急に今までの自分がバカらしく思えた。

でも・・・あたしは行くことを止めなかった。寂しさを、もどかしさを、惨めさを紛らわすために。

そして、仕事もなんとか慣れ始めかけもちで、体は凄く疲れていたけど、こんなに楽しい毎日は初めてで、初めて生きててよかったと思いはじめた頃、あたしは誕生日を迎えた。

「あげはちゃんお誕生日おめでとう!」

「あげはちゃん、やっと19歳だねー!」

「ほんとにおめでとう!」

少ないながらも、わざわざあたしなんかのために来てくれたお客さ

ん。ほんとに嬉しかった。どうしようもなく嬉しくてこんなに感激した誕生日は初めてだった。

この仕事をしててよかった・・・ホントにそう思えた瞬間だった。

「みんな、ありがとー!!」

そして、丁度この時期あたしは、決断した。明確な目標をたてた。行きたい学校をみつけて、両親と逃げずに向かいあって話をして・・・。

きつと、まだ遅くない。今からでも・・・

真弥、只今20歳。私は今も働いている。夢のために。いつかどんなに時間がかかっても叶えようと思う。  
相変わらず、ライブには通ってる。でも、歌舞伎町は卒業できたか

な。たまに遊びにはいくけど、前みたいに中毒みたいになっては通ってない。

あたしの、犯してきた過ちは消えない。手首に残る傷跡も、消える事はないだろう。

まだまだ、所詮は20。知らないことも沢山ある。きっとこれから、辛いことはあるだろう。

でも、あたしは戦ってみようと思う。もう、逃げてばかりの人生は嫌だから。支えもある。何より1人じゃない。

やらないで、後悔するよりは、やってから後悔したい。

こんなに変わった。あたしは、悲劇のヒロインなんかじゃない。

これから先、待っているのはハッピーエンドか、はたまたバッドエンドか。

それは全部あたし次第。

生きるって、こんなにも楽しいことだったんだね。

END

## 「19」決断（後書き）

やっとこさ、書き終わりました。ほんとに、文才ないです笑

いつかりメイクしたいですねこれ……。もっとう、詳しくというか……。

今回はサラッと流しちゃってますね……。コレ。

あまり長くないお話なんですが、更新が遅くて、えらい時間がかかってしまいました。

何より最後まで読んでくださった皆様ありがとうございます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6500c/>

---

19

2010年10月21日22時34分発行